

吉田松陰の教育（その二）

橋 田 義 雄

（四） 松下村塾の教育実際

（1） 村塾の成立と方針

松下村塾は萩市松本村に現在迄保存されている。塾の起源はこれより先天保13年、叔父の玉木文之進が創設し13才の大次郎は兄梅太郎と共に門人となり山宅より此処迄通っている。此の塾は其の後2ヶ年有半にして、玉木の藩務の為に中止されたが其の後断続的に行われ松陰は19才頃までしばしば此の塾に学んでいる。此の塾とは又別に弘化元年松陰15才の年、外叔久保五郎左衛門が村童を集めて自宅に教え、後年その名を襲いで松下村塾と称した。

松陰27才の安政3年には此の久保の塾の為に松下村塾記を作っている。安政2年12月15日野山獄を出て松本村の自宅に幽囚されてから安政3年4年と年を重ねるにつれ、ひそかに来て学ぶ者生じ、安政4年の半には近隣の久保氏の松下村塾と松陰の塾とは一体となって運営された。松陰は久保氏と力をあわせ、杉氏の宅地内に在る小舎を修補して11月5日塾主を久保氏として新に塾舎を開いたのである。同年末には此処に学ぶ者10余名に及び松陰は将来を属目して熱心に指導した。安政5年、門人日増に増加し、塾舎狭隘なるをもって、門生等と共に増築に着手し3月11日10畳半の塾が完成したのである。是が今日保存されているものである。同年7月20日村塾経営に関して公式の許可があり、村塾の名、次第に高まり世の注目する所となった。塾生はその期間が長短まちまちで、一定した数をあげる事は出来ないが前後三ヶ年を通しておよそ80余名であったとされている。松陰入獄後は門人等によって維持され、その後兄梅太郎

叔父玉木等によって経営され明治20年頃まで続いたのである。玉木の自宅に始まってより此処に至る迄およそ40年にして跡をたった。

さて此所に述べる松下村塾の教育とは、安政4、5年における松陰を中心とする教育のことである。

◎塾の経営方針は、松陰の国家観、人生観、学問観によって行われたのはいうまでもなく、それらに関しては上述した処であるが松下村塾記に簡略に明示されているので此処に掲げる事にする。

「……抑（そもそも）人之最も重ずる所は、君臣之義也“国之最大なる所は華夷の辨也、今天下何如なる時ぞや”君臣之義講ぜずして600年近時に至る、華夷之辨と合せて又之を失う、然して天下之人まさに安然として計を得んとなし、神州之地に生まれて皇室之恩を蒙り内は君臣之義を失い外は華夷之辨を遺（わす）れば則ち学之学為る所以、人之人為所以其れ安んぞ在らん哉、是れ二先生之心を痛める所以にして余之記為さざるを得ざるも斯に在り、噫、外叔先生誠によく一邑之弟を教誨し、上は君臣之義、華夷之辨を明かにし、下は又孝悌忠信を失はず、然る後奇傑非常の人起りて之に従い以て山川忿惋之氣を一変し邦家休美之盛を馴致すれば則ち蕞城之眞顛將に是において在らんとす、豈ただに一勝区一都會にてやまんや、果して然らば則ち長門西陲に僻在すと雖も其れ天下を奮発し四夷を震動す亦未だ量るべからざるのみ……」（全集三卷、丙辰文稿）

松下村塾では、君臣の義を講じ、華夷の辨を明らかにする事が眼目であるが、幕府600年の間征夷大將軍となりて天下を治むるは我国の眞の姿ではないという討幕論に共鳴するとともに、だからといって今直ちに之を討つべしとしないのが松陰の行き方である。

安政3年8月黙霖との激しい論争中の手紙に次のような一節がある。

「僕は毛利家の臣なり、故に日夜毛利に奉公することを錬磨するなり。毛利家は天子の臣なり。故に日夜天子に奉公するなり。吾等国主に忠勤するは、即天子に忠勤するなり。然共六百年来我主の忠勤を天子へ竭さざること多し。実に大罪をば自ら知れり。我主六百年来の忠勤を今日に償はせ度こと本意なり。然共……今幽囚して征夷（幕府）を罵るは空言なり。且吾一身も征夷の罪を諫

めずして生を偷む。されば征夷と同罪なり、我主人も同罪なり。己の罪をおきて人の罪を論ずることは吾死すともなさず。故に前の云ふ所の時を得る迄は吾が心腸の工夫と親戚の教諭のみなり。他曰主人を諫て聞かざれば諫死する迄なり。(全五巻303号)

松陰は上述のように幕府を責めて直ちに討幕に立ち上るのではなく、毛利藩も、自分もその中で生を安んじて来て大義にめざめず、一言の忠諫もしてはいないではないか、相手の非をせめる前に真に君臣の義にめざめて、一人より十人え十人より百人えと大義の重んずべきを覚らしめ、王政復古の道に復せしむべきであるとするのである。松陰の念願する処は塾生の1人1人が大義にめざめ勤王の道に夫々の個性、夫々の境遇に応じてつとむるよというのである。

「学は書を読み古を稽(かんが)ふるの力には非ざるなり、天下の事体に達し四海の形勢を審かにする、是れのみ。方今天下の事四海の勢吾未だ其の底止する所を見ず。唯それ未だ底止せず、当に為すべき所以なり。必ずや先づ一國を正しくして諸侯を正しくし、而して幕府を正しくして朝廷を正しくし四海を正しくす、規模先づ己に定り次に仍て之を施す。是れ吾の所謂学なり」(全集三巻 p.17 自書_松柳詩語_)

松陰は先づ己に道が確立して之を行に展ずべきであるとし道さえ確立すれば、天下為すべからざるの地なく為すべからざるの身なし、但事を論ずるにはまさに己が地己が身より見を起すべし。と久坂玄瑞を戒めている。

自己の個性境遇に即して自己の真天地を求める態度が肝要であるというのである。

(2) 塾 風

塾では厳正な規則を立てて生徒を導く事はなく相互に親和し信頼しあって心の通う交際をしたのであった。米を搗き養蠶をしながら勉学することもあったし、或は登山演習撃剣水泳等を共にする事もあった。安政5年6月「示_諸生_」なる一文にいつている。

「村塾禮法を寛略にして規則を擺落するは、以て禽獸夷狄を学ぶに非ず、以て老莊竹林を慕ふに非ず、ただ今世は礼法の末造流れて虚偽刻薄となれるを以て誠朴忠実以て之を矯揉せんと欲するのみ、新塾の初めて設けらるるや(安政4年11月5日)諸生皆此の道に率いて以て相交り、疾病艱難には相扶持し、力役事故には相勞役すること手足の如く然り、骨肉の如く然り。増塾の役(安政5年3月11日)多くは工匠を煩はさずして乃ち能く成るあり、職として是れに之由る。……又嘗て王陽明年譜を読む、謂らく其の門人を警発するは多く山水泉石の間に於てすと、竊かにその理に服す……是を以て會講連業未だ嘗て繩墨を設けず、交ふるに諧謔滑稽を以てす、……之を要するに学の功たる氣類先接し義理従って融る、区々たる禮法規則の能く及ぶ所に非ざるなり。」(全集四卷 p.83)

◎ 切磋琢磨

言志録の中に、善を責むるは朋友の道也とある。善柔を擇んで以て肩をうち袂をとり、相談笑する、之は眞の交友ではない、眞の交友とは切磋琢磨、常に善を責むるの交りでなくてはならぬというのが松陰の経営の眼目である。松陰は京都における谷三山の塾を尋ね、その塾風の親愛にして、兄弟骨肉の如く相切磋し三山の膝下に勉学する美風に感激し、松下の塾も又かくありたしと願ひ、門下生にしばしば語っている。

「嘗て王陽明年譜を読む、其の門人を警発する、多くは山水泉石の間に於てす、竊(ひそか)にその理に服す、吾陽明に非らず、然れども朋友の切磋亦まさにかくの如くなるべし。是を以て會講連業、未だ嘗て繩墨を設けず、交るに諧謔滑稽を以てし、匡稚圭、詩を説くの故事の如し、近春末、圃を鋤するの挙の如し、これ此の意を属するのみ……之を要するに、学の功たるは、氣類先接し義理従って融る、区々たる札法規則の能く及ぶ所に非ざるなり……」(全集四卷 戊午文稿)と諸生に語り、学を成すの要は区々たる規則を以て誠しむるよりも、米を舂き圃を鋤き、その間に氣類先づ接し心情融合すれば義理の道も自ら融合して師弟同朋一如となると強張するのである。

かくして松下村塾は寛略なる礼法のうちに詢に情愛に満ちた塾風を形成し、

やがて一心同体の固き団結となり尊王攘夷の実践運動へと進むに至ったのである。

松陰全集十巻の中に、妹千代さんが語った松陰についての感想がある。

「松陰は顔には痘痕あり、世辞はつとめて用ひず、一見甚だ無愛想なる如く思はれたれども、一度二度と話し合ふ者は、長幼の別なく松陰を慕い懐かざるはなかりき、松陰も相手に應じて談話を試みたり。松陰は又好んで客を遇せり、飯時に御飯を進むるを差ひかゆるが如き事は無かりしなり。有合せの物のみにて出し、快よく客と共に箸物つことを楽しみり。たまたま客を請ずる事あるも、珍味を少しく用意するよりも粗末なるものにて澤山出すことを好めり…」(全集十巻 p.667)

かかる松陰なればこそ、一度接すれば十年の知己の如く、胸襟を開いて語り得たであらう、幽囚人たる彼の下に多くの子弟が相集まったのも宣なるかなである。

「人古今に通ぜず、聖賢を師とせずんば則ち鄙夫のみ、読書尚友君子の事也」

「成徳達材、師恩友益多きに居る、故に君子は交遊を慎しむ」

と士規七則に交遊の大切なることを述べている。

(3) 松下村塾の機構

1. 村塾の子弟

次の表のように、松陰は19才にして家学である山鹿流兵学の師となり、明倫館に出仕して兵学を教授したが、此の時代の門人が12名いた。次に杉家の幽室にこもっていた23才の青年松陰は、密かに教を乞う近隣の者達と兄梅太郎と叔父玉木文之進等7名の人達と読書会を開き、安政元年10月、野山獄に入ってから獄中の囚人11名と司獄2人を相手として、孟子の会を開き、講読会をしている。許されて杉家に帰った松陰は、安政3年の正月以降幽室にて学習会を始め、安政4年、5年と日が立つにつれて門弟子数をまし、安政5年新室を増築する頃には80名内外の子弟を指導している。その在塾の期間においては区々で藩務その他の為、断続的で一年以上の在塾者は僅少である。然し松陰は之等の門

[子弟の名簿]

年代	年令	教育活動	独立後の門人	人数	参考文献
明倫館時代	嘉永元年正月—全四年三月 一九才—二十一才	6才にして吉田家をつぎ、19才迄後見人あれど此の年独立して師家となり、明倫館にて講義す	安田辰之助 佐々木龜之助 高須為之進 久保清太郎 口羽壽次郎 井上壯太郎 中村道太郎 桂 小五郎 赤川直次郎 齊藤弥九郎 益田 弾正 齊藤 栄蔵	12人	全集一卷 未焚稿 第七卷 控書類 稽古事控 上覧控 明倫館再建控 第九卷 関係文書篇
屏居時代	嘉永五年六月—全年十月 二十三才	杉家に屏居中密かに学を請う者と会読す	会読相手 杉 梅太郎 佐々木小次郎 玉木文之進 園田 源八 玉木 彦介 久保清太郎 口羽壽次郎	7人	全集十一卷 睡餘事録
野山獄時代	安政元年十月二十四日—全二年十二月十五日 二十五才—二十六才	同囚の獄囚に孟子を講ず、又漢詩、俳諧、習字等も相互に学習す。司獄兄弟も共に学ぶ、獄風一変す	在獄中の門人 大塚虎之允(75才在獄8年) 弘中勝之進(47才 " 8年) 岡田 一迪(42才 " 5年) 井上喜左エ門(37才 " 8年) 河野 数馬(43才 " 8年) 栗屋 与七(? " 7年) 吉村 善作(48才 " 6年) 志賀又三郎(51才 " 5年) 高須 久子(38才 " 3年) 富永弥兵衛(35才 " 3年) 平川梅太郎(43才 " 2年) 福川犀之助 司獄 高橋貫之助 " 弟	13人	全集 二卷 野山獄文稿 賞月稚艸 冤魂慰草 獄中俳諧 講孟餘話 二卷 丙辰幽室文稿 四卷 戊午幽室文稿 詩文拾遺 五、六卷 書翰篇 七卷 野山獄書 記 書物目録、借本録 東行前日記 九卷二十一回叢書 関係詩文 十卷 関係雑纂
松下村塾時代	安政二年二月二十一日↓ 二十七才	村塾教育の先駆	正月以降 高須滝之允 佐々木梅三郎 佐々木龜太郎 八月以降 中谷 正亮 山賀 某 倉橋直之助 増野 徳民 佐々木謙蔵 高橋藤之進 吉田栄太郎 岡部繁之助 松浦龜太郎 高橋貫之助	13人	全集 二卷 野山獄文稿 講孟餘話 三卷 丁巳幽室文稿 丙辰幽室文稿 武教全書講録 四卷 詩文拾遺 戊午幽室文稿 巳未文稿 五、六卷 書翰篇 七卷 松下村塾食事人名控 八卷 九卷 関係公文書類

〔子弟の名簿〕つづき

年代	年齢	教育活動	独立後の門人	人数	参考文献	
松 下 村	安 政 四 年	村塾教育の確立 時代 (11月5日確立)	国司 仙吉 岸田 多聞 土屋 茶平 高杉 晋作 僧 許道 市 之進 溝 三郎 岡部憲太郎 藤野荒次郎 大賀 直哉 冷泉雅次郎 馬島 甫仙 駒井政五郎 横山重五郎	中村理三郎 飯田吉次郎 久坂 玄瑞 尾寺新之丞 有吉熊次郎 音 三郎 岡田 耕作 前原 一誠 熊野寅次郎 入江宇一郎 品川弥二郎 妻木壽之進 斉藤 栄蔵 馬島 春海	28人 (推定類計四十二人)	十卷 太夫人実成院行状 入江杉蔵投獄日記 全揚屋日乗附録 関係雑纂 村塾油帳
	塾 時 代	安 政 五 年	3月1日増築, 全盛期で9月頃 より実践運動に 入る。 12月26日再投獄	福原又四郎 木梨平之進 富樫 文周 伊藤 利介 (博文) 山根武次郎 入江 杉蔵 萩野 時行 岡 仙吉 大谷 茂樹 飯田 正伯 河内 紀令 滝 弥太郎 原田 太郎 正木 退蔵 山縣 小輔 山根 孝仲 天野清三郎	僧 提山 (松本鼎) 南 亀五郎 時山 直八 野村 和作 (靖) 中谷茂十郎 伊藤伝之輔 小野 為八 河北義次郎 僧 観海 寺島忠三郎 竹下 琢磨 弘 忠貞 安田孫太郎 山田市之允 山根武次郎 (渡辺高蔵翁)	32人

弟中、塾を離れて遠く江戸に学び京に出遊する者に対しても、絶えず懇切なる書翰をかわし鼓舞激励している。今日残っている書翰だけでも全集の第5巻、第6巻に627通の多くを数えている。

此等の門人の所在地を見るに、その大部分は、萩城下の子弟である。藩外の門弟は図表Ⅲの如く富樫文周1人だけで、その他は皆毛利藩に属している。

之等門弟の入塾の動機においては、中谷正亮の如く、父兄の奨めによる者、吉田栄太郎の如く、友人増野徳民に紹介されて入塾した者、或いは土屋肅海の如き名士の推薦によって来たという者で、当時の萩城下には、岡本成章、土屋肅海、福原冬嶺等の学者が夫々塾を開いていたにもかかわらず、数度の藩咎をうけて、過激な危険人物であると見る向もあつたであらうに、わざわざ松下村塾を選んだには、それなりのわけがあつたに違いないのである。

佐世八十郎即ち後世の前原一誠が入門当初を追懐して次のように述べている。

「家君一日余に謂ふて曰く、汝幸に出でてここにあり。宣しく松陰吉田先生に従学すべしと、余の心先生に従はんと欲する者平生の志なりき、故に蹶然として起ち欣々然として手足の舞踏するを覚えず。草卒として往いて先生に従ひ、数年の宿志始めて伸ぶ、恰も雲霧を登りて白日を望むが如し、然りと雖も余の性愚魯にして読書も亦拙なり、故に唯先生の一言を聞きては乃ち之を守るのみ。而して余も又忠義を以て自ら任じ、信ずること甚だ篤し」(玖村敏雄著、吉田松陰伝284)

是を以て見れば、一誠が如何に松陰を慕いその塾に入ることを望んでいたかが察せられる。かくの如く松陰門下に集うものは、世の讒謗、松陰に向けられていても、その言に耳を傾けず、ひたむきに松陰の人格を慕うて集まる志ある子弟であった。

入門を乞う者に対する、松陰の態度は往く者は追はず、来る者は拒まずという寛容な態度であった。吉田栄太郎が不良の三少年、溝三郎、市之進、音三郎を伴うて来るや、松陰は拒まず、易々として快諾する松陰であった。従つて、子弟には藩の高位の家庭のおれば、足軽、軽卒の子も多く、後年その名を成した伊藤博文、山縣有朋、品川弥二郎、野村靖等は当時微々たる足軽に過ぎなかつたのである。之等の傑出せる高位顯官の人々は、松門において当時一流の中心人物として活躍していたのではなく、松門の中心は、高杉晋作、久坂玄瑞、吉田栄太郎、入江杉蔵、前原一誠等の志士で、是等の傑物は、惜しいかな、明治の御維新を見る事なく護国の鬼と散っていったのである。

2. 教科目及教科書

村塾は別に科目として定められたものはなく、教科書も皆別々で年齢や好みによって、違っている。然し武教全書や經書の講読は、5、6人或は10数人相集まり、書物の足りない時は、お互いに見せあって読むという風であった。随って日課は別にきまっておらず、登塾すれば次から次に順番に待って読んで貰い、先生が一度読んで生徒が読み、読めぬ時には先生が又読んで聞かせるという風であったと渡辺翁が後年語っている。(全集十卷渡辺翁談話)

教科に関しては、地理、歴史、算術、經学、兵書、經濟等広い範囲に亘って教授されたが、就中、地理、歴史を重んじたようである。松陰と共に海外雄飛を企てた金子重輔が学問の仕方を問うた時に松陰は、地を離れて人なく、人を離れて事なし、学をなさんと欲せば、先づ地誌を読むべしと教えている。

又歴史、兵学等を教授するに当っても、常に地図と對称しつつ教え、世界地図に関しても造詣が深かったようである。

歴史に関しては、松陰自身大いに之を重視して勉学し坐獄日録の中に「吾幼にして漢籍にのみ浸淫して、尊き皇国の事には甚だ疎ければ事々に恥思ふも多けれど……」というように23才頃、水戸に遊んでその地の名士と交わり、我国体の本義を知り国民としての信念を培うには、国史を学ばねばならぬと痛感している。かくてその後、日本書紀、古事記、日本外史、国史略、皇朝史略等を塾読している。

安政2年兄梅太郎に宛てた書翰には、兄が經学こそ最も尊ぶべしと論じたのに対し、松陰は国史の重んずべき事を強調している。

「經学へ基かぬ学問にては捌け不_レ申との御事、寅も左様思はぬにしても無_レ御座_レ候。象山翁經学者にて往年從遊せし時も論語を熟読すべき由、段々かたり、寅其時は不_レ甚然_レと申、歴史を読んで賢豪の事を観て志氣を激発するに如かずとのみ申居候處、象山云、夫れでは間違が出来ると、然遂に不_レ從_レ其言_レ」と論じ又肥後に到りし時、横井平四郎が黨某、頻に寅に經学を進む。……朱子学をすと言日には、今の明倫官あたりの風では少し憾あり。それで寅も一つ遣て見かと思わぬにてもなし、然れども史を觀るの益あるに若かずと思ふ心遂

に止ず、已に孔子も空言より行事が親切著明とて春秋を作り、孟子も動ともすれば伊尹、周公、伯夷、柳下恵を始め、昔聖賢の事実のみを称道す、然れば心を勵し、氣を養ふは遂に賢豪の事実にしくものはなし……」(岩波書翰集37番)

と語り、歴史が事実を通して切実に志気を鼓舞すると詰論し、修己の工夫に大益ありと主張している。随って塾生に對しても歴史を講ずるにあたり、その時代、その人物に己を置き、古聖賢の琴線に触れて追体験的学習をさせたのである。

又村塾に於ては、算術もかなり重んじている。九数乗除図を作り門人に示し

「聖人之六藝、書数は蓋し其二に居り、二者最も人用に切なり。……近日讀書之士、九数乗除も或は茫乎として無知の者有り、吾れ書と数と、皆精究する所なし、但兒たりし時好んで節用集を觀たりしのみ。今因って此図を作り、人をして九数の體は極方にして、而も用は極圓、以て經となすべく、以て緯を為すべきを觀せしむ亦入門の媒なり。」(全集三卷丁巳文稿)

又品川弥二郎の談に依れば「算術は此頃武家の風習として、一般に士たる者は如斯ことは心得るに及ばずとして卑しみたるものなりしに、先生は大切な事とせられ、書生にも九々を教えられた、余の如きも算術は忘れたるも、此の九々だけは今も猶、記憶せり、余は最も算術が嫌ひなりし、そは算術に通ずれば直ちに俗吏に用ひらるるが故にして、俗吏となれば相当に威權も振ひ得らるる訳なれども、学問の修業が是がために充分出来ざるを以て一つには算術さへ学ばざれば余が父母も俗吏とはせまじとの心より強ひて学ばざりしが、先生は此算術に就ては、士農工商の別なく、世間のこと算盤珠をはづれたるものなしと常に戒しめられた」と。当時、数計を輕視する風潮にもかかわらず、松陰は門弟を指導したのであった。九数乗除図は(全集三卷 p.255)にある。

又經濟の事に関しても松陰は眼をつけ、安政6年、獄中より野村和作に對して、康濟録を読むようにと品川に伝言して、本を送っている。和作はこの本を読み始めたが一向に面白い事がなく倦怠して眠気を催し、先生に別の書を借りてくれと品川に頼んでいる、松陰は野村が、之がわからん様では困ると語られたという。後品川が再び此本を借りた處、野村同様、興味なく読了するに至ら

なかった由である。然し後年野村が神奈川知事となった際、その治下に蟹の害が生じ畑作物が荒らされて困った時、その対策を研究すべく種々の書を集めた中に書記官が此の書を携へて来たのであった。野村は此の時かつて意にもかけなかった此の書がかかる時に役立つを知り、今更ながら松陰の炯眼に感心したという話が伝えられている。

3. 教授法

松陰の教授法は、横山幾太が始めて村塾に入門した際の所感がある。

「誠に親切丁寧にして、其の懇懃なる、且つ一も自ら英雄を以て居り人を虫蟻の如くする状一点も無く、只僅かに年長といふ迄の如し、余大に驚き喜懼惜く能はず、自ら謂ふ、余は小丈夫一乳臭なり、然に世の鬼神視し豪傑視する先生の主角を設けず傲慢の態を見ざる諄々人を導くの風、真に掬すべく、之を当時の苟も一経一能に通ずるの士に比するに啻に霄壤の差あるのみならず、如_レ此き先生の薫陶を受けば樗材或は一用を為すを得べしと、欣然措く能はず、薄暮家に帰り明日又至る……明朝至る、凡受読者十人許りもやあらん、書籍は三、四冊位なりし、先生曰く、外史は平氏を始めとすれども長州人は毛利氏より始むべし云々、側らに地図を備へ置き一々指導せり、又仮令は吉川公の愛后山に上るの論と、小早川の合力して備中に会する論の如きに至れば、先生は必ず巻を措て人々をしてその意見を述べしめ且先生も亦示す處あり、故を以て毎朝僅かに捨枚位読了するに過ぎざれども、実に他の先生に学び百枚も素読するに勝る事遠く、益を得る事多かりし。嗚呼人を教導誘掖する世の及ふ者あらざる處あり……」(全集十卷鷗磯釣餘鈔 p.548)

此論を見る時、松陰の教授振が如何にあったかを察する事が出来る。その温顔が示す様に、先生の教授振は詢に懇切丁寧で諄々と説いて倦む事なく夜の講読の如き、鶏鳴を聞くに至るまでも熱心に続けられる事がしばしばであったという。

講読においては、門弟と共に思考し論議し、先生一人が壇上から得々として説述する様な態度はみじんもなかった。横山幾太が他塾ならば百枚位、講読の

進む処を、松陰塾では僅か十枚位しか進まなかった。然しその間質疑をし議論をかわし他の塾で百枚素読するよりもはるかに効果があり、世の塾の及ぶ処ではないと感嘆している。

又門弟の一人であった天野御民はいつている。「先生門人に書を授くるに当り、忠臣孝子身を殺し節に殉ずる等の事に至るときは、満眼涙を含み、声を顫し甚きは熱涙點々書に滴るに至る、是を以て門人も亦自ら感動して流涕するに至る、又逆臣君を寤（くるし）ますが如きに至れば目眦裂け聲大にして怒髪逆立するものの如し、弟子亦自ら之を惡むの情を發す。」（全集十卷 p.542, 天野御民 松下村塾零話）

受くる者は氣鋭の青少年、語る者は、熱血愛国の志士松陰である。かくの如き教育においてこそ維新回天の国家大改革にあたり、身を挺してその第一線に立ち護国の鬼と散った久坂、吉田、前原等の如きあり、又生き延びて天下の幹となり国政の要職に咲いた伊藤博文、山縣有朋、品川弥二郎、野村和作等の門弟が輩出したのである。

「歴史を読むに、自ら歴史中の人物となるべし、楠氏を読めば正成の心持をして、此事には如何に処するや、如何にせば宣しかりしやと心を練り、又足利氏を読めば尊氏の心持をして読むべし、尤も悪人を学ぶは忌むべきことなれども、其境遇其位置に己が身を置かざれば心を練ること能はずと戒しめられたるは常のことなり。又或は例刻より少々早く塾へ来りしに読書の聲の聞へければ誰か来て居るならんと思ひ内に入りしに12、3才の小供が先生の前に居て国史略を聞き居るなり……此時余にも聞けとありし故進て聞き居りしに恰も楠公討死の段にて、先生は涙を垂れて居られしが、此僅か13才の小供に教へらるるにもやはり斯くあるは、先生が常に謂はるる如く、自ら其境に在るの心して読まるるを以てなり。又余が二十一史を授かりたる時々丘飛死し、金人酒を釣んで喜ぶ段の時にも、先生涙を垂れて滂沱たりし。」（敎教育発行松陰号60頁）

（4） 武士道教育

松陰の教育は、その対象を武士に限定しているわけではなく、近隣の武士以

外の子供達にも指導の手をさしのべている。教育の目的と方法においては、武士と町民との区別はなく、前巻において、立志、殉忠愛国の精神、学問の態度の項目の中で論じているので此処では重ねて論ずる必要はないのであるが、武士道という観点から松陰の思想を要約すれば、彼の士規七則が最も簡明に表現していると思われる。之は叔父玉本文之進の嫡子彦介が加冠の日即ち成人の日に、毅甫という字(あぎな)をつけてやり、士規七則を贈ったのである。

1. 凡そ生れて人たらば、宣しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。蓋し人には五倫あり、而して君臣父子を最も大なりとなす。故に人の人たる所以は忠孝を本と為す。
1. 凡そ皇国に生れては、宣しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は萬葉一統にして、邦国の士夫世々禄位を襲ぐ、人君民を養ひて、以て祖業を続きたまひ、臣民君に忠にして以て父志を継ぐ。君臣一体、忠孝一致、唯だ吾が國を然りと為す。
1. 士の道は義より大なるはなし。義は勇に因りて行はれ、勇は義にて因りて長ず。
1. 士の道は質実欺かざる以て要と為し、巧詐過を文るを以て恥と為す。光明正大、皆是れより出づ。
1. 人古今に通ぜず、聖賢を師とせずんば、則ち鄙夫のみ。読書尚友は君子の事なり。
1. 徳を成し材を達するには、師恩友益多きに居り、故に君子は交遊を慎む。
1. 死して後已むの四字は言簡にして義廣し堅忍果決、確乎として抜くべからざるものは、是れを舍きて術なきなり。

以上の士規七則を見るに、始めの二節は、人倫を論じ國体の精華を述べわが国民の進むべき大道を論じている。人倫中君臣、父子の忠と孝とが徳徳の源泉であると定言している。第三節は士道においては特に義を重んずべきで義は勇によって実践さるべきであるとし第四節は武士の生活は質実を旨とすべきであると論じている。第五第六節は武士の修養、鍛練の道は聖賢を師として読書尚友すべきで第七節においては武士の覚悟として死而後已の決心を以て事に臨み、

確固不拔、千万人ありと雖ども吾往かんの覚悟なくてはならんと強調しているのである。

尚武士道については、武教全書講録において、武士たる者の日常生活における戒めを見る事が出来る。此の書は松陰の師、山鹿素行の著書で士規七則が武士教育の大綱を論ずるものとすれば、武教全書はその細目とも言うべきであろう。以下その要点を抜粋して見る。

◎序文に於て士道の大要を論じて曰く、「士道と云は、無礼無法、粗暴狂悖の偏武にても濟まず、眞武眞文を学び身を修め心を正ふして國を治め天下を平にする事は士道也」

と称し、次に國体の事に論及し「國体と云は神州は神州の体あり、異国は異国の体あり、異国の書を読めば、兎角異國の事のみを善と思ひ、我國をば却て賤みて異國を羨む様に成り行く事、学者の通患にて、是神州の体は異国の体と異なる訳を知らぬ故也……」となし、我國の我國たる所以を知らずしては、士道も士道たり得ず。幼兒より國体の上に立つての士道を志し以て身を修めば志士仁人たるを得べしとなし、之武教小学の大意なりと論じている。

◎ 夙起夜寐^び

先づ夙起夜寐を以て一篇の題となし、武士一日中の教戒とし且諸篇の綱領としている。孟子のいう浩然之氣は、徒に大言壯語、暴虎馮河の勇によって生ずるものに非ずして、平且之氣を養ふ処に、眞に千万人ありとも吾行かんの氣を養ふものであるとし、家事、賓客、事_レ君、事_レ父、侍_レ長、会_レ友、顧_レ行、披_レ書、為_レ夜戒_レに至る迄、終日の事一切が養氣の存する所にして、かくて終始少しも厭改せずんば浩然の氣果して及び難からずと痛論している。今日松下村塾を見るに、柱に刀痕がある。之は松陰が江戸に護送される事を憤慨して柱にきりつけたと称するものがいるが、塾生で明治の時代まで生きていた、渡辺蒿藏翁の談話に依れば決して然らず此の様な粗暴の振舞は決して先生が容認する処ではなかった、と言明している。後年子爵となった野村靖も又此の言あり。松陰は決して、かかる粗暴の振舞をなす事なく又子弟にも厳として戒めたという。松陰は夙起夜寐に関し、塾生に、日々の生活の反省を記録する様に一簿を作成

させその表紙に「身体髪膚受_レ之父母_一、不_レ敢毀傷_レ孝之始也、立_レ身行道_一、揚名於後世_一、以_レ顯_レ父母_一孝之終也」の語を題し、己の姓名をその下に書いて血判を押させ修養工夫の要を論じている。

◎ 燕居(閑暇における修養)

此の節にて、武士一日の事は、諸士に謁し、賓客に對するの外武芸を習ひ、武技を論じ武器を閲する外なしとし従事閑暇を戒めている。小人閑居すれば不善をなすの譬をひき閑居の士多く、武教を害し罪戾に陥る者の多きを歎じている。

松陰は村塾の空地において常に擊劍をなさしめ、時には萩の城下において銃陣の練習を行い、その志氣を鼓舞しその身体を鍛錬し、燕居を許さなかった。塾の旺盛なる氣魄は、かかる日常の鍛錬に基く所大なるものがあつた。

◎ 言語応対

言語応対に関する篇は誠に切實な事が記述されているので熟読して心に留め一言一語、一応一對、暫くも之を忘れてはならないと誠しめている。

◎ 行往座臥

行往座臥は敬備、覚悟について論じ、敬とは怠の反対で、怠とは油断することである。随つて敬とは常に油断することなく覚悟する事で、行往座臥常に油断なく細事を慎しみ、傍人を礙(さまた)げず、非礼を為さず、過言を出さず、慎言勤行なるべき事を論じている。衣食居についても、常に籠城の時の心掛けをもって処理し、肥肉美粟は志を喪し又書画器物を翫好する如きは、武士たる者の為すべき事ではないと切論している。松陰の生涯は、その論ずるようによきに質実そのものであつた。

其の外、飲食、色欲に就いても論及し、一飲一食より男女衽(じん)席の間に至る迄、片時も武士の家業を忘れぬ事也と教えている。

(5) 個性教育

中曾根内閣が依囑した、臨時教育審議会においては、教育方針として自主自立をあげ、次に個性伸長の教育をあげている。

松下村塾の教育が、伊藤博文や山縣有朋の如き高位高官の地位に迄立身出世をした者が数多い処に着目して勝れた立派な教育であるというのであれば、それは、大きな見誤りであると言わねばならぬ。村塾の教育こそ、個性にそった教育であって決して社会的活動をして高位高官になる事を眼目としたものではない。その事は松陰が安政3年4月村塾において、王陽明の純金説を引用し諄々として子弟に説いている事でも明瞭である。王陽明はこういつている。

“人夫々才能あり、聖とは才能の輕重に非ず、即ち聖とは、私欲消盡して、天理純全たるの名也、量目の輕重に非ず。故に聖とは純金の如し其の輕重に至りては、聖たる所以に非ざるなり”之は王陽明の伝習録の中にあるものを松陰が引用して更に説明を加え、人は夫々純金になることが肝要で堯舜や孔子は同じ純金でも百兩の聖人であらう。文王や周公は七八十兩の聖人で純金の量は少ないが純粹完全に自己の才能を磨きあげた処に聖人である。松陰は、自分も才能は之等の聖人に比較すれば問題にはならぬ程軽い、然し私利私欲を払い除いて精一杯に磨きあげれば、1兩か2兩位の純金はあるだらう、人間の才能は天の与うる処、要はそれを純粹に磨きあげる事であると説いている。即ち個性に即しながら能力に応じて花開き実を結ぶ事が教育であると論じているのである。
(全集二卷講孟餘話頁170)

安政6年正月、松陰は入江杉藏に告ぐの中に子弟の個性について述べ之を論評している。暢夫(高杉晋作)は識見氣魄、他人及ぶなし。但だ一暢夫を得て之に抗せしむるに非ずんば必ず害を生ぜん。然れども兩暢夫相抗すれば、必ず一暢夫の斃るる者あらん。是れ亦憂ふべきなり。此の間の苦心、吾れ桂と一言せしに、桂も之を首肯せり。

無逸(吉田栄太郎)の識見は暢夫に彷彿す。但だ^{スコソ}些の才あり。是れ大いに其の氣魄を害す。氣魄一たび衰へは識見亦昏む、嘆ずべし嘆ずべし。諷するに老屋の説を以てせば、或は一開発あらんか。抑々面従腹誹せんか、亦未だ知るべからず。但し前日絶粒の事の如き八十、子楫、無咎、各々諫書あり。其の懇惻は則ち感ずべし、然れども吾を罵りて短慮と為し無益と為し、人の笑をのこすとなすこと、乃ち士毅(小田村伊之助)と雖も論じ得て透らず、試みに之れを

して無逸に語らしめば、無逸は則ち微笑せんのみ。固より吾れの慮短きに非ざるも、才の長ぜざるを知らばなり。嗚呼、鐘子期遇ひ難しとは其れ唯だ無逸か。

実甫(久坂玄瑞)の方は縦横無礙なり。暢夫は陽頑、無逸は陰頑、皆人の駕馭を受けず、高等の人物なり。実甫は高からざるに非ず、且つ切直人に逼り、度量亦窄(せま)し。然れども自ら人に愛せらるるは、潔烈の操、之れを行(や)るに美方を以てし、且つ頑質なきが故なり。之れを要するに、吾れに於て良莠の利ある、当に此の三人を推すべし。

八十(前原一誠)は勇あり智あり、誠実人に過ぐ。所謂布帛粟米なり。適くとして用ひられざるなし。其の才は実甫に及ばず、其の識は暢夫に及ばず、而れども其人物の完全なる、二子も亦八十に及ばざること遠し。吾が友肥後の宮部鼎蔵は資性八十と相近し、八十父母に事へて極めて孝、余未だ責むるに國事を以てすべからざるなり。

子楫(阿部富太郎)は鋭邁俊爽なり。然れども吾れ常に其の退轉せんことを惧る。退轉の勢一旦萌すことあらば、駟馬もこれに及ばず。吾れ平生最も愛する所は子楫、無逸なり。無逸は吾れ其の方敏なるを愛し、子楫は吾れ其の氣鋭なるを愛す。皆其の己れに似たるを愛す。皆吾が過なり。無逸の頑は吾れ或は平にすること能はざらん。是れ其の敬すべき處なり。子楫は其の頑なし、然れども氣自ら恃むべし。且つ子楫は母賢に弟友なり、以て家を託するに足る。是れ宣しく責むるに國事を以てすべきなり。是れ吾が心赤の語なり汝切に記せよ。

その他、福原又四郎、松浦無窮、有吉子徳、天野清三郎等多数の門弟に就いて逐一、その長とし短とする處を論評している。論まさに其の眞髓をうがち、子弟の一人一人に対して、意識的に観察し個性の長短を洞察し、今日のいわゆる個性教育を村塾教育の実践の中で展開しているのである。

松陰は、短い29年の生涯において、数多くの書翰を残している。全集5、6巻は彼の書翰集である。勿論書いた手紙が全部残っているわけではないから、実際はもっと多くの書翰を書いたであろう。書翰の外に贈_レ溝三郎_一與_レ木原慎齋_一書、等書翰ではないが、意見や、教訓や送敍等数多くのものが残っている。

◎丁己文稿の中に溝三郎の説という文章がのっている。「無逸(吉田栄太郎)

三生を拉し、自分の所に託された。三生とは音三郎、溝三郎、市之進である。音はおとなしい子だが市はかしくてぬけている。なかなかいい子である。処で溝は商家の子だが14才になってもまだ仕事をせず遊んでいる。自分は余りすきではなかったが栄太郎の頼みで引きうけた。或夜その溝が言うには、私は商人をやめて医者になりたいがどうでしょう、と。そこでどうして商人を喜ばないのかと問うた処、商人になれば富貴の人に諂はねばならない、それが嫌なんだという。諂はず屈せないのであれば、商人もできんが医者も出来ん、今日の医者は殊にそれが甚しいみんな諂屈しているのではないかと言ひ返してやった。そして、君子たる者は渴しても盗泉の水を飲まない、又志士たる者は窮しても決して節操を守って誤らないものである。此の飲まず忘れない決心さえあれば医者もやれよう、商人にもなれる。自分の家の分を忘れて他の事を願うのは人の道ではないぞ、汝が諂せず屈しさえしなければ何も恐れるものはないではないか、医者になるなぞ言う必要はない。と言ってきかせた処、溝三郎は大いに悟る処があったようで、先生、私に学問を教えて下さい、どうしたらよいのでしょうかというので、君の家は骨董屋だという、それであれば多くの古書がある筈である。君はその古書の中に坐し古書の中で臥しているのだから商売の傍らそれを読めば、富が人を恵むように、学が人間の道を教えてくれるであらう。時に困窮することがあっても、盗泉の水を飲まず、節を守って誤ることなければ立派な商人というべきで商道にかなうものである。そうなれば音にも市にも負けない立派な人になれるぞ、無逸もせつかく頼んだ事だし、きっと喜ぶであらう。しっかりやれよというてやって、溝三郎という名をつけてやった」

◎ 贈_二市之進_一

「一日市之進余の傍に在り、几^{つくえ}によりて書を学ぶ。余命するに帚掃の事を以てす。市己に諾すれども、書を学びて止めず。余再び之れを言ふ、市云はく、「心に十葉を寫し完らんと期すれども、二葉未だ完ならず。完^{まわ}り盡して然る後事に従はん」と余之れを言ふこと三、四たび市猶止めず。余。黙然として蹶起し、其の紙筆を奪ひて之れを地に投ず。市収め取り、復た二字を寫して、然る後起ちて余が命に趨く。事卒る。余市を進めて謂ひて曰く、「爾余と抗せんと

欲せしか”市曰く、“敢へてせず”“敢へてせざれば何ぞ吾が命に趨くことの緩かりしや”市曰く“死罪、市実に先生と抗せんと欲せり”余曰く“爾能く我れと抗せば、天下抗すべからざるの人なけん、能く天下の人と抗せば、吾れ爾に與せん。然らずんば吾れ爾をゆるさざるなり”と市首をたるること之久しうす。吾れ徐ろに曰く、“爾妙年にして穎脱す與に道に入るべきなり。屈せず退かざるは、爾の真心是れのみ、市曰く“然り”余曰く“聞く汝父を喪ひ、母に事へて恭ならず、居處敬ならず、親戚隣里規責すれども従はずと、爾子弟の事すら且つ為す能はず、安んぞ能く天下の抗せんや、苟も天下の人と抗せんと欲せば吾れに一説あり。今より志を立て、天に升起地に入り、水を踏み火に投じ人言の使むる所、死なりと雖も屈せず、艱なりと雖も退かざれ。是れ不屈不退にして、爾の真心を行ふに足る、而して何ぞ天下の人、抗するに足らんや”と市奮然として曰く“願はくは先生の命、是れ聴かん”と。

市年十四、頑兇無頼にして、頗る親戚の患ふる所たり。無逸諄々として誘導し、書を授けて之れを読ましめ、遂に以て余に託す、余一見して之れを異とす、今果して凡兒に非ざるなり。ここに於て、余市と約して曰く“今後30日、前言を以て踐と為せ。30日の後、吾れ將に更に語る所あらんとす”と因って書して贈と為す。八月十九日。(全三卷丁巳幽室文稿218頁)

頑兇なる市之進が松陰の教えに導かれて、先生の教えに従いたいと言うに至っている。松陰も真剣だが市之進も真剣そのものである。火花の散る真剣勝負の中に師と弟の魂はふれあい融けあい一体となって行者となる。ここに松陰の個性教育の真髓がある。

切磋琢磨、師弟一体の個性教育の実態を如実に物語る実話が同じ此の丁巳文稿の中に書かれている。

◎ 煙管を折るの記

一日有隣(富永)と土風を論ず、無咎(松浦松洞)、無逸、市、溝、皆これに在り。夜深うして燈もえのこる。談岸田生の事に及ぶや、余の憂ひ色に見はれ、一坐黙然たること之れを久しうす。無逸慨然として煙管を把って之れを折る、曰く“吾れ其れ此れより始めん”と。無咎と市、溝と聲応じて、管已に分たる。

有隣曰く“爾が輩はたして能くかくの如し、吾れ安んぞ折らざるを得んや”と、因って余をして之れを折らしむ。余曰く“煙（たばこ）は飲食の餘事と雖も、慣れては性となる。吾が性、煙を憎むこと甚だし、然れども諸君一時の抗慨、終身の無聊を致さんことを憂ふるなり”。と、有隣、二無憤然として悦ばずして曰く“子吾が言を疑ひたまふか。今岸田生と市、溝と年皆十四にして公然煙を嗜むこと、長老先生に異るなし、而して当今举世皆然り。吾が輩寧んぞ一岸田生の為めにして然らんや。子尚ほ吾が言を疑ひたまふか”と。余再拜して罪を謝して曰く“諸君果して然らば、松下の邑、其れ此れより起らん。吾れの憂ひ以て解くべきなり。吾れ其れ筆を掲げて之れを記せん”と、丁巳九月三日夜二十一回猛子謹んで記す。明朝此の文を把り、岸田生の為めに講解一番す。言末だ終らざるに、生俯伏して涕泣し、時を過ぎて乃ち止む。生遂に一語なし、而して余も又敢へて之れを責めず。後数日、生盡く煙具を以て其の親家に送致し、敢へて復た吸はず。其の書を読み事を執るを觀るに、精苦すること往日に過ぐ。蓋し諸君の意に感ぜしならん。高杉春風（晋作）余の為めに道ふ“吾れ年十六にして便ち嗜煙を好む、長者之れを規むる者ありしも、而も従はざること已に三年なり。誤って再び煙具を路にすつ、吾れここに於て感ずる所あり、断然割去せり。是れ小事なりと雖も、おもえば亦難かりき。諸君の苦心は吾れ則ち之れを付る”と春風行年十九、銳意激昂、学問最も勤む、其の前途、余固より料り易からざるなり。因って併せて其の事を書し、以て諸君に示す。諸君其れ遼豕の咲ひとなるなかれ。……吾れ之れを書して無逸に贈る。臘月念夜

此の文は吉田栄太郎が江戸に滞在していたのに対しかつて煙管（きせる）を折って禁煙を誓った事があったがそれを聞いた岸田が感泣してとうとう煙草をやめたぞと追記し、江戸迄その書を送っているのである。筆まめというにはあまりにも入念、心情こまやかというか、このような温かい濃やかな情が子弟達の心を動かしたと思われる。